インドネシアにおける保育・幼児教育施設の視察報告

石井玲子 [1]*

2018 年 9 月 15 日～9 月 23 日の 9 日間、新潟県立大学の海外実地研修がインドネシアのボゴール市とその近郊にて実施された。本稿では、実地研修の中で訪問した三つの保育・幼稚教育施設の概要と保育・教育の内容について報告する。訪問した施設は、(1) 西ジャワ州ボゴール市の都市部にある PAUD（Pendidikan Anak Usia Dini、乳幼児教育機関）と Posyandu（地域保健所）、BKB（母親向けプログラム）を併設している施設、(2) 西ジャワ州の山間部、チパナス地域の村にある PAUD、(3) ボゴール市の都市部にある大学付属乳幼児教育センターの三つである。

キーワード： インドネシア、幼児教育、保育、就学前教育

はじめに

新潟県立大学と交流協定を締結しているボゴール農科大学（Bogor Agricultural University）人間生態学部（Faculty of Human Ecology）の公衆栄養学科（Department of Community Nutrition）と家族・消費者科学学科（Department of Family and Consumer Sciences）のコーディネイトにより、2018 年 9 月 15 日～9 月 23 日の 9 日間、インドネシアのボゴール市とその近郊で、本学の海外実地研修が行われた。著者はボゴール農科大学からの招聘で、日本の幼児教育についての講義を現地で行い、この実地研修にも参加した。

本学の国際地域学科、子ども学科、健康栄養学科の学生 13 名の学生と教員 4 名が本実地研修に参加した。母子保健・栄養や幼児教育についての講義や国際協力に関連する組織の UNICEF、JICA、Vitamin Angels（NGO）による講義に加えて、Puskesmas（保健所）、Posyandu（母子保健センター）、味の素インドネシア工場、Salam Rancage（ソーシャル・ビジネス）、保育・幼児教育施設を視察し、見学や交流を行った。本稿では、これらの訪問施設の中から三つの保育・幼児教育施設について、園の概要と保育・教育の内容を報告する。

方法

訪問した保育・幼児教育施設は（1）西ジャワ州ボゴール市の都市部にある PAUD（Pendidikan Anak Usia Dini、乳幼児教育機関）と Posyandu（母子総合保健センター）、BKB（母親向けプログラム）を併設した施設、(2) 西ジャワ州の山間部、チパナス地域の村にある PAUD、(3) ボゴール市の都市部にある大学付属乳幼児教育センターである。それぞれ、施設や保育の様子を観察した後、本学学生が日本の折り紙や手遊びを園児に紹介し、一緒に遊ぶ活動をした。また、そこで働く先生や子ども、保護者である母親に質問をした。

結果と考察

1．インドネシアの乳幼児教育施設について

インドネシアの義務教育は、小学校 6 年、中学校 3 年の計 9 年間であり、乳幼児期の就学前教育は義務教育ではない。近年、インドンネシア政府は、学校教育の準備段階としての保育・幼児教育（Early Childhood Care and Education, ECCE）を重要視し、就園率を増加させようと努力している。2001 年、インドネシアの国家教育省のノン・フォーマル教育部門に保育幼児教

[1] 新潟県立大学人間生活学部子ども学科
* 責任著者　連絡先：rishii@unii.ac.jp
利益相反：なし

育総局（Direktorat Pendidikan Anak Usia Dini）が創られ、政府が公式にノン・フォーマル教育を行う保育・幼児教育施設を増やしていった [1)]。2011 年以降は、フォーマル教育、ノン・フォーマル教育を行う保育・幼児教育施設の両方をインドネシア政府が一括管理している [2)]。

「フォーマル教育」とは、学校教育システムの中で行われている制度化された教育活動であるが、それに対して「ノン・フォーマル教育」は学校教育のシステム外の教育活動で、目的を持って組織され、行われている教育のことである。「イン・フォーマル教育」は組織的ではなく、日常の経験等に基づく生涯にわたる教育のプロセスである。開発途上国において、学校や幼稚園に行けない子どもに対するノン・フォーマル教育活動はフォーマル教育の補完的役割として重要となってきており、国や NGO によるノン・フォーマル教育が充実している例もある [3)]。

Coombs（1968）のこれらの三つの教育の概念は、インドネシアの就学前教育の概念と同じである。今回、インドネシアで訪問した施設もノン・フォーマル教育を行っている都市部 PAUD（乳幼児教育機関）と農村部 PAUD、そしてフォーマル教育を行っている幼稚園を含む大学付属乳幼児教育センターを訪問し、それらの違いについて学んだ。

２．乳幼児教育施設の形態

インドネシアの乳幼児教育施設の約 99%は民間が運営しており [4)]、保育・幼児教育はフォーマル教育、ノン・フォーマル教育、イン・フォーマル教育に分類できる。フォーマル教育には普通幼稚園（Taman Kanak-Kanak：TK）とイスラム教幼稚園（Raudlatul Athfal：RA）の二つの形態がある。ここでいう「普通幼稚園」とは、宗教と結びついていない幼稚園のことを意味する。フォーマル教育の普通幼稚園は教育文化省、宗教幼稚園は宗教省が管轄しており、それぞれの省で決められたカリキュラムに沿った教育が行われている [1)]。

ノン・フォーマル教育を行う施設として、プレイグループ（kelompok bermain：KB）、託児所（チャイルド・ケア・センター）（Taman Penitipan Anak：TPA）、プレイグループに類似したその他施設（Satuan Paud Sejenis：SPS）がある。また、その他の乳幼児に関連したサービスとして、Posyandu （母子総合保健センター）と乳幼児のいる母親向けプログラム（Bina Keluarga Balita：BKB）があり、これらは妊婦や幼い子ども向けの保健サービスと両親向けの育児に関する教育を合わせたサービスとなっている。以下に、保育・幼児教育施設の各形態についてまとめる。

施設タイプ	年齢	時間	内容	運営形態・担当省庁
幼稚園（TK） ①普通幼稚園（TK） ②イスラム教幼稚園（RA）	4-6 歳	週 5-6 日 1 日 2-3 時間	・就学準備のための教育 ・初期識字 ・発育を促す ・イスラム教教育（RA）	・フォーマル ・普通幼稚園は教育文化省 ・イスラム教幼稚園は宗教省
プレイグループ（KB）	2-4 歳	週 2 日以上 1 日 2 時間	・発達を促す ・初期識字	・ノン・フォーマル ・学校制度外の施設 ・社会福祉省管轄 ・教育文化庁（カリキュラム）
託児所（チャイルド・ケア・センター）（TPA）	3 ヶ月 -6 歳	週 5-6 日 1 日 8-10 時間	・両親共働きの子の保育 ・発達を促す	・ノン・フォーマル ・社会福祉省管轄 ・教育文化庁（政策・ガイドライン作成）
プレイグループに類似したその他の乳幼児教育機関（SPS）	2-6 歳	週 2 日以上	・発達を促す ・初期識字 ・教育プログラム	・ノン・フォーマル ・様々な自治体・省庁により運営 ・教育文化庁（政策・ガイドライン作成）
Posyandu（母子総合保健センター）	0-6 歳	月 2 回 1 回 2 時間	・母親と子のための保健サービス ・母子保健、栄養、予防接種等の指導	・保健省の管轄 ・内務省と協同
乳幼児のいる母親向けプログラム（BKB）	0-5 歳	月 2 回 1 回 2 時間	・育児に関する教育 ・発達を促す子どもの発育促進のための活動	・女性エンパワーメントと児童保護省

表１　インドネシアの保育・幼児教育施設 [1)2)]

３．視察施設の概要

（１）都市部における PAUD

ここからは実際に視察した施設の様子を紹介していきたい。はじめに、著者と本学子ども学科学生 4 名、国際地域学科学生 1 名の計 6 名で、ボゴール市の都市部にあるコミュニティ・ベース（地域密着型）のノン・フォーマル教育を行っている乳幼児教育機関（PAUD）を訪問した。ボゴール農科大学教授が引率兼通訳（インドネシア語から英語への通訳）をしてくれた。その PAUD は Posyandu（母子総合保健センター）と BKB（母親向けプログラム）を併設しており、週末になると地域の母親と子ども（園児とは別の親子も含む）が訪問し、発達相談、栄養指導、や予防接種等をするため、Posyandu として使用する部屋が保育室とは別に用意してあった。

この園は、ボゴール農科大学の農学部の元教授が定年退職後に自分の家を改築して夫婦で始めた乳幼児教育施設である。園児数は全部で 60 人（3～4 歳児が 8 人、4～5 歳児が 17 人、5～6 歳児が 35 人）、保育者は 5 人で、そのうちの 2 人が幼稚園教諭の有資格者で 3 人が資格を持ってない先生であった。資格の有り無しにかかわらず、ほんの少しの給料を 5 人で平等に割っているので、「実際には先生たちはボランティアみたいで申し訳ない。」と園長が説明していた。

この園の運用費の約 20～30%はインドネシア政府から資金補助として受けているが、十分な予算がないため、本やおもちゃ、遊具、机などの多くは寄付で賄っている状況であった。著者が訪問中にも、地域の人が不要になった絵本を園に寄付する姿が見られた。また、ボゴール農科大学の家族・消費者科学学科から幼児教育の専門科が定期的に来て、PAUD に対してアドバイスをしたり、遊具の寄付をしたり、様々な形で大学が協力しているとのことであった。

園児たちは 1 日 3,000 ルピア（日本円で約 23 円）を持参して、9 時から約 2 時間の教育を受ける。教育内容は教育文化庁が作成した幼児教育のカリキュラムに沿って行っている。今回の視察の時には、5～6 歳児クラスは保育室に机を置いて、静かに絵を描き、担任の二人の先生が子どもの描いた絵を他の子どもたちに見せて、どのような絵かを説明していた。4～5 歳児クラスは家から持参した軽食を食べており、炒めたごはんをタッパーに入れている子どもやスナック菓子を持ってきている子どもたちがいた。3～4 歳児は園庭の遊具で遊んでいた。どのクラスも私たちを歓迎してくれて、親しみやすい子どもたちが多かった。

今回の訪問で著者が一番驚いたことは、保育時間の約 2 時間、母親たちが門の前で座りながら、子どもたちを待っていることであった。一部の母親は帰宅するが、ほとんどの母親は帰宅せずに毎日 2 時間おしゃべりをしながら、自分の子どもを待っているとのことである。

また、月に数回、ボゴール農科大学から先生を招いて、この園で母親の支援や教育が行われている。例えば、母親向けのインドネシア語の読み書きや英語の授業、子どもの発達に関する教育等を実施している。インドネシアの貧困地域では、両親が幼い時に幼児教育や学校教育を十分に受けてない場合が多く、まずは母親に対しての教育を行わなければ、幼児教育の重要さは国全体に広まらないという理由から、親への支援・教育が盛んに行われている。

この PAUD では、学生たちが日本の折り紙を園児と先生に紹介し、折り紙で遊ぶ活動をした。その際、子どもたちも先生方も折り紙にとても興味を示し、すぐに折り方を覚える先生もいた。今後も折り紙の活動を続けていきたいとのことであった。また、学生たちは日本の手遊び・身体遊びを園児たちの前で実践し、子どもたちも歌に乗って身体を動かすことを楽しんでくれた。

（２）農村部における PAUD

次に、西ジャワ州の山間部、チパナス地域にある村の PAUD（乳幼児教育機関）について述べたい。ボゴール市内から車で山道を 2~3 時間かけて行くと、ニンジンが特産物である山の中の農村に着いた。その村にある PAUD は「教育を受けられない子どもたちに教育を」ということを方針として、個人の自宅の一部を PAUD として使い、村の子どもたちに幼児教育の機会を与えている。この園は一部屋しかない小さな施設なので、本学の学生 13 名と教員 4 名が 2 グループに分かれて、時間をずらして訪問した。ボ

ゴール農科大学からは教授 2 名、学生 7 名が同行し、通訳等をしてくれた。

この村の小学校の先生もしているという園長先生（女性）は違う村の出身の方で、高校を卒業しているが、この村の住民の多くは小学校に 3 年間しか通わず、中学校に通う人は少ない状況である。数年前までは小学校が 3 年生までしかなく、現在は 6 年生まであるものの、途中でやめる子どもが多いとのことである。そのため、幼児教育や教育の重要性を村民に伝えていき、村を変えていきたいという思いで、数年前にこの施設を始めたと言う。この園には三人の保育者がいるが（園長含む）、園長以外の先生はこの村出身であり、中卒である。三人ともこれまで、幼児教育に関する専門的な教育を受ける機会はなかった。

現在、村民の約 25%の家庭の子どもがこの PAUD に来ているが、75%の子どもは来ていない。園児数は登録している子どもの数が約 40 人おり、1 日に 25 人ぐらいが通っている。対象年齢は 4〜6 歳であるが、2 歳以上の子どもが通っても良いことになっている。保育時間は 8 時から 10 時まで、または 11 時までで、園児は 30,000 ルピア（約 230 円）を初めて来る時に園に支払い、通園の度に 2,000 ルピア（約 16 円）を払わねばならない。資金的には政府からの援助は一切ないため、保育室の設備は十分とは言えない。小さな保育室一室にはホワイドボードと小さな机が一つあり、手作りのおもちゃや色画用紙が置いてあった。保護者のお母さんたちが作ったという壁の華やかな装飾や星やハートの形をした手作りののれんが部屋の雰囲気を明るくしていた。

このような状況であるが、この PAUD で行っていた教育は興味深いものであった。私たちが訪問した時は園児全員で、日本の「幸せなら手をたたこう」（原曲はアメリカ民謡）と同じ曲を現地の言葉で歌いながら、日本の身体遊びと同様に、音楽に合わせて身体を動かしていた。その後、日本の手遊び「グーチョキパーでなにつくろう」（原曲はフランス民謡）と同じメロディを歌い、先生が園児一人ひとりの名前を呼んで、一人ずつ返事をしていた。毎日、様々な歌を保育に取り入れているということであった。

訪問した日は、その土地の特産物であるニンジンをテーマにした保育が行われていた。異年齢の子どもたちが 1 クラスに集まっているため、発達段階に合わせた活動を行っており、5〜6 歳児の子どもたちは、ニンジンをインドネシア語・英語でのように書くのか、ということを学び、3〜4 歳児の子どもたちはニンジンの絵を描く活動をしていた。また、ニンジンをどのように調理して食べるか、ということを歌いながら学び、それらの活動の後、皆で輪になって、収穫したばかりのニンジンを順番に少しずつ食べてみる、という活動を行っていた。ニンジン一つから様々な方向へ学びが広がっていく様子を見る機会となった。

外国からの客が珍しいのか、子どもたちは恥ずかしそうにしていたが、少しずつ私たちと打ち解けていった。本学の学生は PAUD の先生たちに教わりながら、園児たちの活動に参加させてもらい、また逆に、学生たちが提供した遊び（日本の折り紙や身体遊び）に園児たちが参加し、子どもと触れ合う時間を持った。

この PAUD で一番印象深かったのは、やはり母親たちの様子であった。保育室の隣に部屋があり、保育時間である 8 時から 10 時まで、母親が集まっていた。訪問した都市部の PAUD と同様に、毎朝、子どもと歩いて通園してきた後、母親は家へ帰らず、保育が終わるのを待っている。そこでは、話をしたり、朝食を食べたり、保育室の装飾をしたり、手芸や工作をしたりしているとのことであった。

そこで、母親たちに何点か質問させてもらった。約 20 名弱いたが、一人を除く全員の夫が農家で、一人は夫が本屋の店員であり、祖父母と同居している人は少なかった。結婚をした年齢は、13 歳の人や、15 歳〜18 歳と若い人が多かったが、農村地域では若くして結婚する人が多いようである。インドネシアでは原則、結婚できる年齢は男性 19 歳、女性 16 歳ということであるが、それより若くでも裁判所の許可がもらえれば結婚も可能であるらしい。政府が推奨している「子どもは二人まで」という家族計画プログラムの影響があるのか、ほとんどの人が子どもは一人か二人であった。

「子育てで困難なことは何ですか？」と質問

をしたところ、「幼児教育を自分が受けてないので、PAUD で子どもたちが教育を受けることがどのような効果があるのかわからない。」「どうやって良い人間に育てるのかがわからない。」と答えてくれた。前述のとおり、この村では多くの人が小学校 3 年間の教育しか受けておらず、「教育を受けること」により、この先どうなってしまうのか、という不安を持っているようであった。また、子どもたちに「将来何になりたいですか？」と質問したところ、女の子では、「先生」「医師」、男の子では「警察官」「先生」「車」という答えが返ってきた。

この村の訪問では、何より、母親たちの華やかで生き生きしている姿や、異国から来た私たちゲストにとても積極的に話しかけてくれる様子に驚き、母親たちのこのエネルギーと素晴らしい幼児教育があれば、この村が今後、発展していくのではないかと感じたほどであった。

この PAUD を訪問する前に、歩いて数分の場所にある同じ地域の Posyandu（地域保健所）を見学し、妊婦や母親、乳幼児のための保健サービスの様子を見させてもらった。妊婦の時からサービスを受けることができ、母子の栄養や予防接種、乳幼児の発達・ケアに関する様々な知識を学べる機会がインドネシアの小さな村にもあることが確認できた。

（３）大学付属乳幼児教育センター

三番目に視察したのは、ボゴール市中心部にある大学付属乳幼児教育センター（Labschool）である。この施設は、普通幼稚園（4～6 歳・フォーマル教育）を中心に、プレイグループ（2～3 歳、ノン・フォーマル教育）、チャイルド・ケア・センター（2～6 歳、ノン・フォーマル教育）の要素を合わせ持つ。つまり、4 歳から通える幼稚園が毎日 9 時から 11 時まで教育を行い、3 歳以下の子どもたちは、プレイスクールの活動を提供している。プレイスクールは親子で短時間、園に来て遊ぶが、目的は家庭やノン・フォーマル教育を通じて、心身の発達や生きるための基礎的な力を身につけることである。幼稚園部には、日本の保育所のような役割をするチャイルド・ケア・センターが併設され、両親が働いている家庭は仕事が終わる時間まで子どもを預かってくれるシステムとなっている。ケア・センターの対象年齢は 2～6 歳、保育時間は、7：30 から 16：30 までで、半日、1 日、数時間等の時間によって保育料が変わってくる。

幼稚園の教育理念は、自立性、創造性、責任感、思いやりを育てることである。園児数が約 60 人で、職員は園長 1 人、先生 7 人、と特別支援教諭（アシスタント）1 人、事務スタッフ 1 人、清掃スタッフ 2 人、セキュリティスタッフ 2 人から構成されている。この園には、幼稚園教諭の資格を大学で取得した先生が多く、大学院出身の先生もいる。

著者と本学学生 5 人（子ども学科学生 4 人と国際地域学科学生 1 名）がボゴール農科大学の先生方と一緒にこの施設に到着した際、園児がインドネシアの伝統音楽に合わせたダンスを踊って歓迎してくれた。毎朝、全園児が集ってインドネシアの伝統的な歌や踊り等を楽しむ「朝の会」があり、朝の会でよく踊るダンスを見せてくれた。その後、各クラスの保育の様子を見学した。

5～6 歳児クラスは、1 クラスの園児数が 20 人に対して担任の先生が 2 人で、保育室はカラフルな椅子と机があり、部屋の壁の鮮やかな色合いの装飾に目が行った。この年齢のクラスになると、リーダシップ教育が重要となり、訪問時も、今日のリーダー役の子どもが皆に何か説明をしていた。リーダーとしての態度や発言の仕方を学び、その他の子どもは、リーダーの話を聴く態度を養っているとのことであった。

各クラスにはその月のテーマがあり、5～6 歳児クラスは「農村の暮らし」、4～5 歳児クラスは「乗り物」、3～4 歳児クラスは「虹」と「海」の 2 クラスであった。教室はテーマに合った装飾がなされており、各クラスでテーマに基づいた教育が行われているが、一ヶ月ごとにテーマが変わっていく。また、「身体」や「家」等の毎週のテーマ、「マナー」等の毎日のテーマも決められている。

3～4 歳児クラス（園児数 7 人と 9 人の 2 クラス）では、指先の運動技能を発達させる目的で、スポンジに水を吸収させる活動と、指を使って絵の具で自由に絵を描く活動をしていた。4～5 歳児クラスは、自分の好きな感情を好きなよう

に白い紙に描く活動を行い、自分が何を書いたのかを先生に説明していた。また、指人形と歌を使って、マナーの勉強をしていた。

授業料はインドネシアの幼稚園としては高額であり、1 日 2 時間の幼稚園の授業料が年間 500 万～700 万ルピア（39,000 円～55,000 円）で、前後の保育を利用すると、プラスで費用がかかる。また、この幼稚園にはアフタースクールの教室があり、専門の先生が来て、歌、伝統的な踊り、絵、イスラム教等の教室を開催している。授業料は追加になるが、希望者はそのようなアフタースクールに入れることもできる。

本幼稚園では、すべての活動に明確なテーマ、意図があり、目標がはっきりと決められた「一斉保育」の活動が多い。インドネシア政府の教育文化庁が作成したカリキュラムに沿って教育が行われており、自立心や責任感を育み、人格形成に重点を置いている。インドネシアのカリキュラムによると、教育の準備段階としての幼児教育の目的は、道徳や宗教的価値、社会的感受性、認識能力、言語、身体、自立性、芸術性など精神的・身体的側面の発達を促す手助けをすることであるとされている [5]。本施設において、このような目的を明確に持ち、それらを実践している場面が確認できた。

結語

本稿では、インドネシアの三つの異なる乳幼児施設を視察して、それぞれの園の概要と保育や教育の様子を報告した。インドネシアは日本の約 5 倍の面積を持ち、約 2 倍の人口がいる東南アジア最大の国であり、大小約 17,500 もの島々から成る他民族国家である [6]。人種、言語、宗教、文化等は多様性があるため、インドネシアの就学前教育の現状も単純にまとめられるものではない。今回の視察した施設だけでは、インドネシア全体のことは語れないが、貧富の差が大きく、都市部と農村部での生活形態が異なるインドネシアの特徴を知ることができた。

Yulindrasari（2012）がインドネシアの保育・幼児教育の現在の課題として、以下の 5 点を挙げている [7]。①保育・幼児教育を受ける機会の地域的な不公平さ、②フォーマル保育・幼児教育施設とノン・フォーマル教育施設で働く保育者間の福利厚生の不均衡、③訓練を受けていないノン・フォーマル教育施設で働く保育者が多いこと、④村部やノン・フォーマル教育施設における学習用設備の不足、⑤親が保育・幼児教育について正しく認識していない、という点である。

ユネスコの報告（2005）によると、インドネシアの保育・幼児教育を受ける機会の地域的な不均衡さは、その地域の貧困レベルに関連していることがわかっている。富裕層と貧困層、都市部と農村部の間の大きな格差はフォーマル教育施設とノン・フォーマル教育施設のどちらにおいても明確である [1]。

今回の視察においても、Yulindrasari（2012）の①で問題点を挙げているとおり、教育を受ける機会の地域的な格差が見られた。農村部の PAUD と都市部の大学付属の乳幼児教育センターは対照的であった。前者は幼児教育を受ける機会がこれまでなかった地域の施設であり、後者は富裕層の子どもたちが通う施設と言える。

農村部の PAUD では母親のほとんどが小学校 3 年生までしか教育を受けられない環境で育ち、幼児教育を受ける機会がなかった。それに対して、都市部の大学付属乳幼児センターの幼稚園で会った一人の保護者は、日本の企業で働いていた経験があるという母親であった。彼女は日本語もでき、海外で働く経験も長いらしい。授業料から考えると、おそらく通園している子どもの家庭は富裕層が多い。近年、インドネシア政府はどの子どもも保育・幼児教育を受ける機会が平等に持てるようになることを目標に様々な政策をしており、国全体の就園率、就学率は上がっているものの [2]、今回、地域間の格差を実際に目の当たりにした。

また、Yulindrasari（2012）が指摘する②③については、訪問した都市部 PAUD と農村 PAUD で起きている重要な問題と同じであった。大学を卒業して幼児教育の学士を取得する等の訓練を受けた質の良い保育者が必要であることと、保育者に相応の報酬を支払える状況が必要であることを両施設とも強調していた。④についても、都市部 PAUD の設備に関しては、地域からの寄付で成り立っており、農村部 PAUD は設備がほとんどない状況であった。それに比べて、

都市部の大学付属乳幼児教育センターは様々な遊具やおもちゃ、学習道具等が揃えてあり、設備の差も大きかった。

しかし、何よりもインドネシアで必要とされているのは、Yulindrasari（2012）の⑤で挙げられている「親が保育・幼児教育について正しく認識していない」という状況 [7]を変えていくことかもしれない。これに関しては、訪問した施設すべてにおいて、園長や先生が指摘していた。農村地域では教育が何のために必要であるのか、という根本的な部分で理解できない保護者もまだ多く存在していた。

また、大学付属乳幼児教育施センターでは、幼児教育を学校の「勉強」と同じように考え、読み書きや計算を習得してほしいと願っている親も多いと聞いた。大学付属幼稚園の先生方を対象に行った日本の幼児教育についての著者のレクチャーの中で、「遊びを通して学ぶ」という事例を紹介した際、先生たちが目を輝かせながら聞いていた。園でもそれを目指したいが、なかなか実践するのが難しく、また、保護者も理解してくれない、とのことであった。視察した三つの施設ともに、幼児教育の大切さや小学校教育と幼児教育との違いを親に理解してもらうために、両親に対して教育をする機会を作っている。

以上のように、今回の視察の内容から、インドネシアの保育・幼児教育は発展しながらも様々な問題に直面しているということを肌で感じることができた。現在、インドネシアにおける幼児教育の普及は十分と言える状況ではないが、幼児教育・保育の重要性に対する認識が徐々に高まってきていることがわかった。また、Posyandu（地域保健所）、BKB（母親向けプログラム）等の母親に対する教育が都市部だけでなく、農村地域にも広まっていることが確認できた。今後もインドネシアの保育・幼児教育は量的にも質的にも発展していくと考えられるが、本視察でも明らかとなった就園率、就学率の地域間格差や保育者の質の向上、保護者の意識改革等の問題をどのように解決していくかが今後の課題となるであろう。

謝辞

今回のインドネシアにおける実地研修の実施と保育・幼児教育施設の視察にあたり、コーディネイトと引率をしてくださったボゴール農科大学の先生方、大学院生、学生の皆様、そして、ご協力してくださった訪問先の施設の皆様に感謝いたします。

文献

1) UNESCO. Policy review report: early childhood care and education in Indonesia. UNESCO Early Childhood and Family Policy Series 2005; 7-19.
2) Yulindrasari H. ECCE in Indonesia: Policy and Challenges-Part1. https://www.childresearch.net/projects/ecec/2012_06.html（参照 2018 年 11 月 25 日）
3) Coombs, PH. The world educational crisis; a systems analysis. Oxford: Oxford University Press, 1968; 138-144.
4) 外務省．諸外国・地域の学校情報：インドネシア（平成 29 年 12 月）https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC10200.html（参照 2018 年 11 月 25 日）
5) 池田充裕、山田千明編著. アジアの就学前教育―幼児教育の制度・カリキュラム・実践―．東京：明石書店、2006; 184-205.
6) 田中義隆．インドネシアの教育―レッスン・スタディは授業質的向上を可能にしたのか―．東京：明石書店、2011; 3-25.
7) Yulindrasari H. ECCE in Indonesia: Policy and Challenges-Part 2. http://www.childresearch.net/projects/ecec/2012_07.html（参照 2018 年 11 月 25 日）